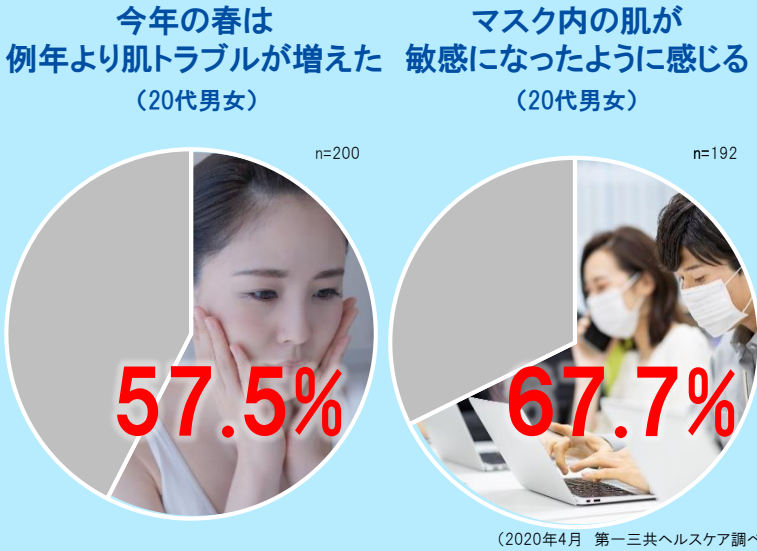


2020年春のコロナストレスがもたらした肌への影響

P1~4



コロナストレスで、敏感肌が増えている?! マスクの長時間着用も、肌トラブルの原因に

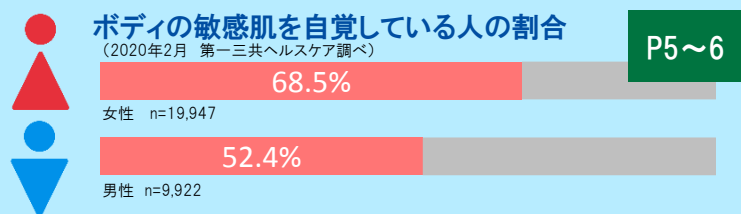
第一三共ヘルスケアが本年4月に行った調査から、今年の春は例年に比べ、約3割が肌トラブルが増えたと感じており、特に20代では6割近く (57.5%) に達し、若い世代を中心に増えていることがわかりました。

また、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、マスクの長時間着用を余儀なくされている中、マスク内の肌が敏感になったように感じる人は、4割以上存在し、特に20代では7割近く (67.7%) にのぼりました。

敏感肌を自覚しながら、「洗浄」の大切さを知らない?! 「洗う」は、敏感肌ケアの一丁目一番地

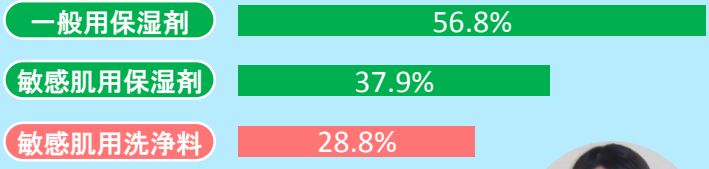
第一三共ヘルスケアが本年2月に行った調査では、女性の約7割 (68.5%)、男性の約5割 (52.4%) がボディの敏感肌を自覚しています。しかし、敏感肌への対処法として、保湿剤を使用する人は多くても、敏感肌用洗浄料を使用する人は3割未満 (28.8%) でした。

塗るケアは重要ですが、そもそも洗うときに肌に摩擦を与えたり、洗い残しがあつたりすると、肌のバリア機能が低下します。鎌倉かまりんヒフクリニックの福永院長は、「洗うことによる保湿ケアは、敏感肌ケアの一丁目一番地。塗る保湿ケアの効果を高めることにもつながる」と話します。



ボディの敏感肌経験時における対処法

n=691 敏感肌自覚者男女 複数回答 (2020年2月 第一三共ヘルスケア調べ)



塗るケアだけでなく
上手に洗うことで
保湿ケアの効果を高めることにも
鎌倉かまりんヒフクリニック 院長 福永有希先生



洗うことから敏感肌のバリア機能をいたわる保湿洗浄

P7~10



- 低刺激性、弱酸性、アレルギーの原因物質を極力カット
- 開発当時から変わらない独自の処方コンセプト
- 肌をやさしく洗うことから考える



調査レポート① この春コロナストレスで、敏感肌が増大

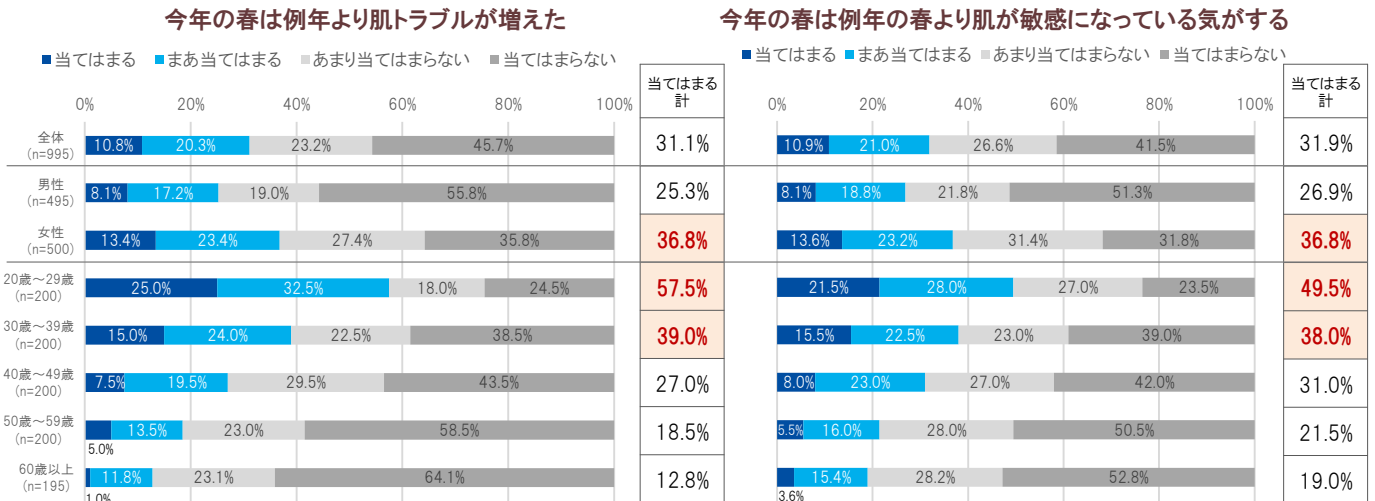
今年に入り、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的な感染拡大に伴い、日本でも外出自粛などライフスタイルを変えることを余儀なくされました。当社が行った調査から、今春は例年と比較して肌トラブルや敏感肌を感じる人が若い世代を中心に増え、特にストレスを抱えている人ほどその傾向が強いことがわかりました。また、今年敏感肌になったと感じている女性のうち、8割以上がストレスを感じていることが明らかになりました。

《調査概要》

- 調査対象 : 20歳～69歳の男女
- 調査地域 : 全国
- 調査手法 : インターネット調査
- 有効回答数 : 995名
- 調査時期 : 2020年4月13日～4月20日

今春は、20代・30代で肌トラブルが急増

調査対象者全員に、今春の肌の変化について尋ねました。その結果、「今年の春は例年より肌トラブルが増えた」と感じる人は、全体で約3割（31.1%）であるのに対し、年代別では20代が約6割（57.5%）に達し、30代でも約4割（39.0%）に及ぶことが明らかになりました。「今年の春は例年より肌が敏感になっている」と回答した割合も、同様の傾向にありました。また、いずれにおいても、男性より女性の方が肌の変化を感じている割合が高くなっています。



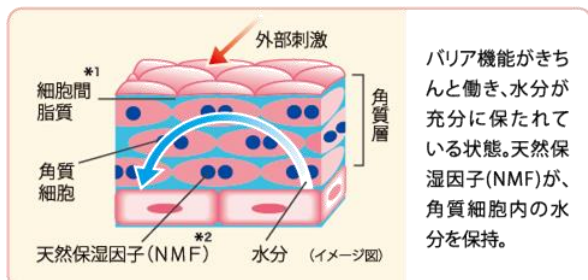
※構成比(%)は小数点第2位以下を四捨五入しているため、合計しても必ずしも100%にならない場合があります。

敏感肌とは

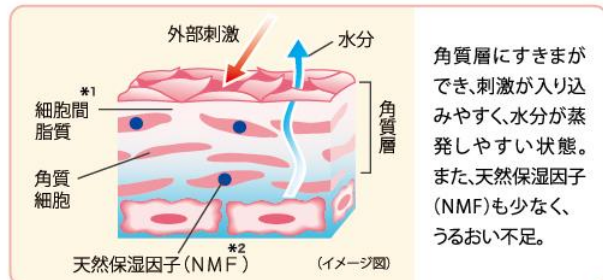
肌のバリア機能の低下などにより、刺激に対して肌の感受性が高まった状態が「敏感肌」

私たちの体は全身が肌に覆われており、「敏感肌」と最も関係するのが、一番外側にあるわずか0.02mm(ラップ1枚程度)の角質層です。肌は日常的に気温や湿度、紫外線や外気に含まれる物質など、多くの外部刺激によりストレスを受けていますが、この角質層が刺激から肌を守り、水分の蒸発を防ぐバリア機能として働いています。しかし、肌のバリア機能が低下し、うるおいが不足すると、外部刺激に対して反応しやすくなります。つまり、「敏感肌」はバリア機能が低下しがちな状態であり、肌の感受性が高まったため、肌トラブルが起きている状態なのです。

●すこやかな肌



●敏感肌・乾燥肌

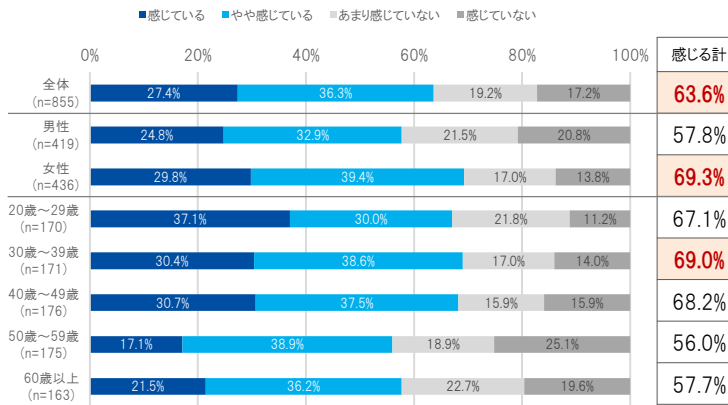


*1 細胞間脂質:角質細胞間でバリア機能の一端を担う *2 NMF: Natural Moisturizing Factor

新型コロナウイルスの影響で、6割以上の人が閉塞感や恐怖感を持つ

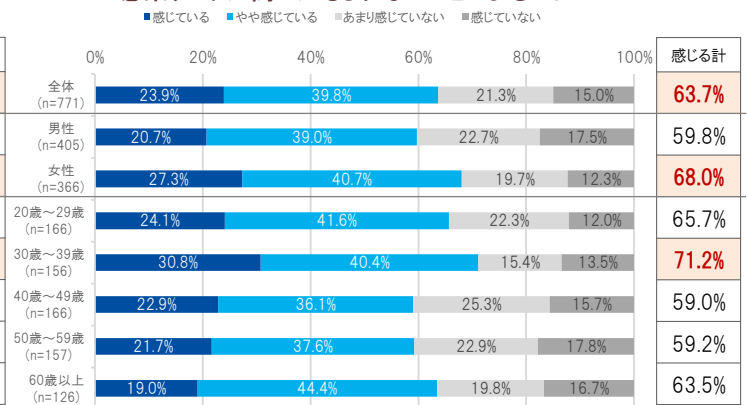
新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、各種自粛が求められるなど、私たちの生活は大きな変化を余儀なくされました。調査でも、「外出できないことによる閉塞感からくるストレス」を感じている人の割合は全体で6割以上(63.6%)、「仕事の都合などで十分に外出を自粛できず、感染リスクが高いかもしれないことによるストレス」も全体で6割以上(63.7%)となっています。いずれの結果も、男性より女性の方で、また30代で高い傾向がみられました。

外出ができないことによる閉塞感からくるストレス



※対象:「そもそもそのような状況にない」と回答した人以外

仕事の都合などで十分に外出を自粛できず、感染リスクが高いかもしれないことによるストレス



※対象:「そもそもそのような状況にない」と回答した人以外

今年になって敏感肌になった女性は、新型コロナウイルスによるストレスを感じている

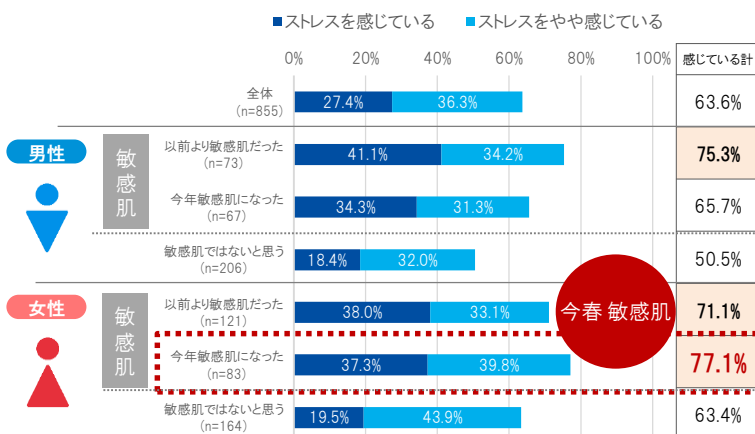
精神的なストレスは、自律神経の乱れを起し、肌に悪影響をもたらすとされています。そこで、敏感肌と新型コロナウイルスの影響によるストレスとの関係を調べました。その結果、「外出ができないことによる閉塞感からくるストレス」「仕事の都合などで十分に外出を自粛できず、感染リスクが高いかもしれないことによるストレス」に関して、男女ともに「敏感肌」の人の方が、ストレスを感じていることが明らかになりました。

特に、女性において「今年の春は例年より肌が敏感になっている」と回答した人は、8割近く(77.1%)が「外出ができないことによる閉塞感によるストレス」を感じ、「感染リスクが高いかもしれないことによるストレス」に関しては8割を超える(84.0%)結果になりました。

外側からの刺激だけではなく、外出自粛による閉塞感、感染リスクへの不安といった内因的なストレスが、敏感肌へとつながっている可能性があります。

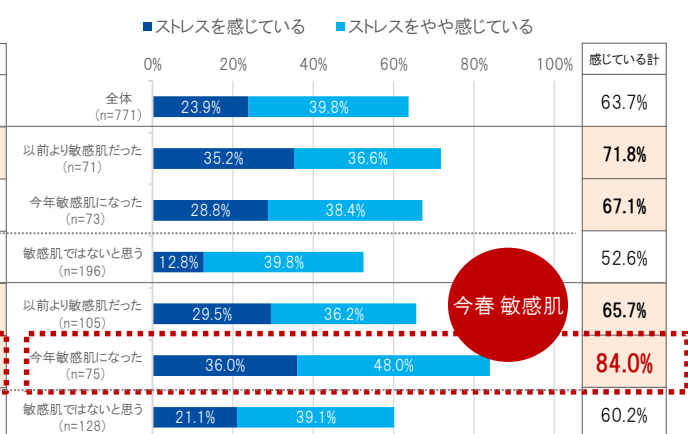
敏感肌と新型コロナウイルスの影響によるストレスとの関係

敏感肌と「外出ができないことによる閉塞感からくるストレス」の関係



※対象:「そもそもそのような状況にない」と回答した人以外

敏感肌と「仕事の都合などで十分に外出を自粛できず、感染リスクが高いかもしれないことによるストレス」の関係



※対象:「そもそもそのような状況にない」と回答した人以外

※構成比(%)は小数点第2位以下を四捨五入しているため、合計しても必ずしも100%にならない場合があります。

調査レポート② マスクによる肌トラブルも増えている

新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、マスクを着用する機会が増えています。調査の結果、マスクの着用により「肌の負担が大きいと感じる」「肌が敏感になった」と感じている人は少なくないことがわかりました。特に20代・30代の女性においては、約半数がニキビや吹き出物、肌のベタつき、カサつきなどに悩んでいます。

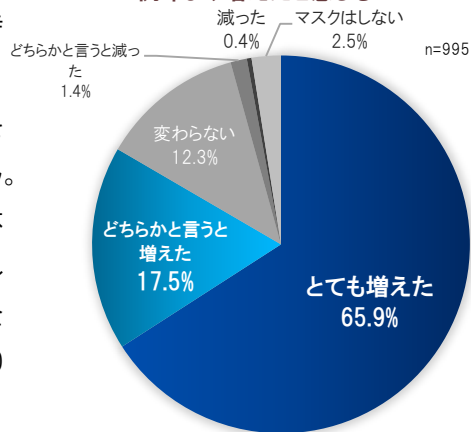
感染防止のためのマスクで肌への負担を感じる人も4割以上

新型コロナウイルスの感染拡大防止に向け、公衆衛生の基本としてマスクの着用が推奨されています。本調査でも、「今年の春はマスクをする頻度や時間が例年より増えた」と感じている人は、8割以上(83.4%)に及びました。

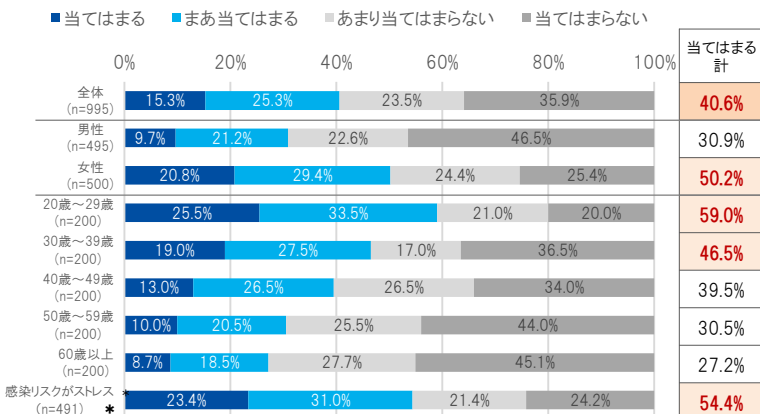
交通機関や商業施設などの密集空間ではもちろん、外出時は常にマスクを着用していることも多く、そのため肌トラブルに悩んでいる人も少なくありません。「今年の春はマスクによる肌への負担が大きいと感じる」と回答した人は、全体で4割以上(40.6%)となり、女性(50.2%)や20代・30代で高い傾向にありました。また、同様に「マスク内の肌が敏感になったように感じる」と回答した人も全体で4割以上(44.7%)となり、特に女性が高く(52.8%)、年代別では20代・30代で半数以上の高い結果となりました。

そして、仕事の都合などで外出せざるを得ず、「感染リスクがストレス」になっている人ほど、マスクによる肌への負担を感じる割合が高いことも明らかになりました。

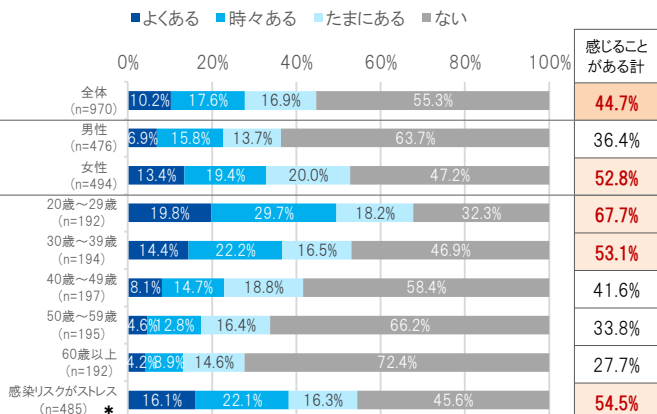
今年の春はマスクをする頻度や時間が例年より増えたと感じる



今年の春はマスクによる肌への負担が大きいと感じる



マスク内の肌が敏感になったように感じる



* 仕事の都合などで十分に外出を自粛できず、感染リスクが高いかもしれないことによるストレス

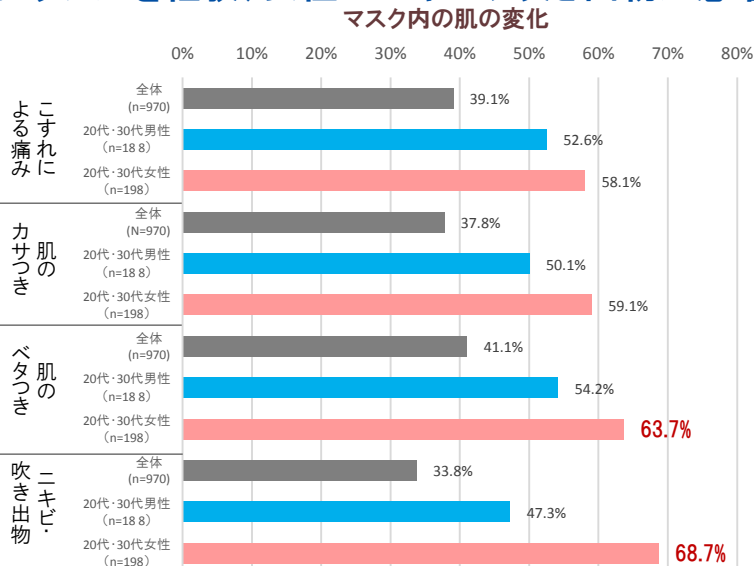
※対象:「マスクをすることがある」と回答した人

20代・30代の約半数がマスクによる肌トラブルを経験、女性にニキビや吹き出物が急増

特にマスクによる肌への負担や敏感肌を感じている傾向にあった20代・30代男女と調査対象者全体の平均で、マスク内の肌トラブルについて比較しました。

調査対象者全体の平均では各項目が3~4割前後であるのに対し、20代・30代では男女ともに高く、5割前後となっています。

特に20代・30代の女性においては、「ニキビ・吹き出物」が約7割(68.7%)となり、「肌のベタつき」も6割を超える(63.7%)結果となりました。



※対象:「マスクをすることがある」と回答した人

※構成比(%)は小数点第2位以下を四捨五入しているため、合計しても必ずしも100%にならない場合があります。

調査の結果、新型コロナウイルスなどの影響により、例年以上に肌トラブルや敏感肌を感じている人がいることが明らかになりました。実際に、診療の現場でもそうした変化が起きているのか、鎌倉かまりんヒフクリニック院長 福永有希先生にお話を伺いました。



**鎌倉かまりんヒフクリニック
院長 福永 有希 先生**

浜松医科大学卒業。横浜市立大学附属病院皮膚科入局後、おもに神奈川県内の総合病院や皮膚科へ勤務。横浜市立大学附属病院皮膚科助手、平塚共済病院皮膚科部長、おふな皮ふ科院長などを経て、2018年、神奈川県鎌倉市に「鎌倉かまりんヒフクリニック」開院。日本皮膚科学会皮膚科専門医。日本美容皮膚科学会、日本アレルギー学会の各会員。

肌は、生活環境の変化に敏感に反応

新型コロナウイルスによるストレスや外部刺激に気をつけて

ストレスや外部刺激で、肌のフローラが崩れる

近年、腸内細菌叢(さいきんそう、腸内フローラ)が話題になっていますが、実は皮膚にも200種以上の皮膚常在菌が存在していることがわかっています。これら皮膚常在菌による代謝物などが皮膚表面を弱酸性に保ち、外界からの病原体の侵入を防ぐバリア機能を担っていますが、乾燥や紫外線といった外からの刺激を受け、皮膚常在菌のバランスが崩れると、アレルギー反応や炎症反応などが起こり、肌トラブルへとつながります。

皮膚常在菌のバランスを崩すのは、外からの刺激だけではありません。精神的なストレスを受けるとホルモンバランスが乱れ、皮膚の常在菌のバランスが崩れることがわかっています。

今回、第一三共ヘルスケアが行った調査結果では、新型コロナウイルスの影響により6割以上の方がストレスを抱え、そうした人の方が敏感肌を感じている割合が高いという結果が出ています。日本国内だけでなく世界中が不安に包まれる中、肌にも影響が出てきていることは不思議ではありません。

化粧よれによる「マスクニキビ」が多い

また、マスクを着用することが多くなったことで、マスク内の肌が敏感に感じたり、肌トラブルが起きていらっしたりする方も多いという結果が出ています。実際に、私のクリニックにも、マスクによる肌トラブルで来院される方がいらっしますが、特に多いのが「マスクニキビ」です。マスク内の肌は、湿度が部分的に高くなり、口腔内の雑菌が浮遊した状態で、肌本来の状態とは異なる状況に置かれています。こうした状況下で、皮膚常在菌のバランスが崩れ、ニキビを誘発している可能性があります。

マスク内のニキビ・吹き出物は、特に20代・30代の女性の方に多いという結果が出ています。これはお化粧の影響かもしれません。お化粧をしてマスクを着けると、メイクがよれて毛穴が詰まりやすくなります。ニキビを引き起こすアクネ菌は、毛穴の皮脂などの老廃物を餌にして増殖するので、お化粧をする機会が多い女性の方に「マスクニキビ」が多く出ていることも不思議ではありません。

これから夏に向けて気温が上がり、汗ばむシーズンになりますが、マスクを着けた生活は続くと思います。「マスクニキビ」をはじめとする肌トラブルを防ぐためにも、マスクを時々外して口のまわりを換気すること、できれば1日2〜3回マスクを替えて清潔に保つこと、そして女性の方は、マスクまわりには化粧を控えるようにしていただきたいと思います。

汗が多くなるこれからの季節はますます注意が必要

ご注意いただきたいのは、マスクまわりだけではなく、皮脂や汗によるベタつき、また、エアコンや紫外線による乾燥は、夏の肌トラブルを引き起こしやすくなります。

汗に含まれる成分によってアレルギー反応を起こすタイプの人もいます。発汗の多い夏には肌につく汗の成分も増えますので、かぶれを避けるためにも適切な洗浄ケアが必要です。

特に今年は、新型コロナウイルスによるさまざまなストレスが、アレルギー症状を助長させる可能性もあるので、ぜひ気をつけていただきたいと思います。

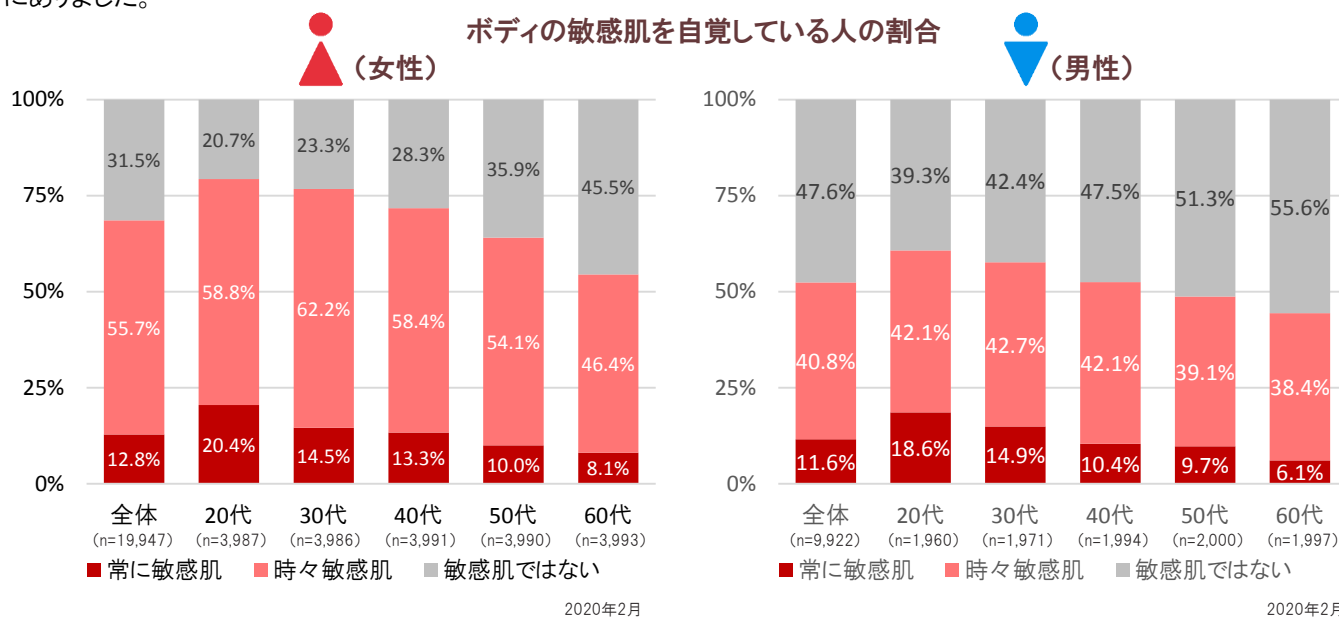
肌トラブル防止の第一歩は、バリア機能の低下を防ぐことです。できるだけリラックスした時間を持ち、肌の清潔な状態を保ち、この夏を乗り切っていただきたいと思います。

乾燥スパイラルに陥る前に見直したい「洗うケア」

肌のバリア機能が低下しがちな敏感肌のケアをするには、肌質に合った方法へとスキンケアを見直すことが必要です。そこで、多くの方が「塗るケア」を考えますが、塗るケアと併せて「洗うケア」を意識することが大切です。

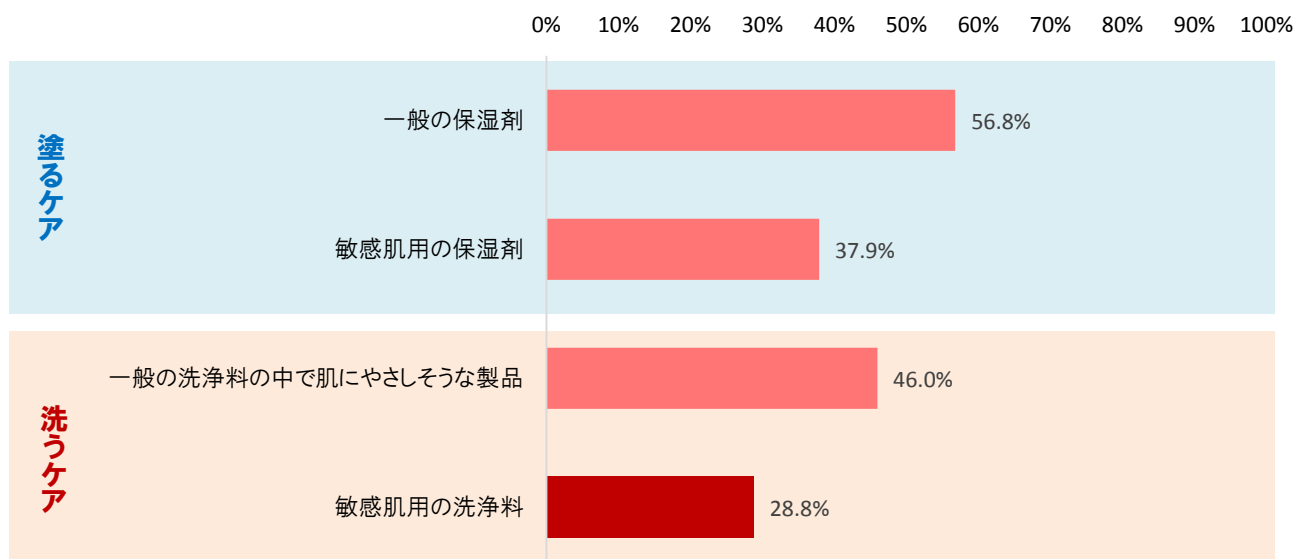
女性の約7割、男性の約5割がボディの肌質を敏感肌と自覚するも、敏感肌の対処として「洗うケア」への意識が低い

当社が2020年2月に行った調査では、女性の約7割(68.5%)がボディの肌質が敏感肌であると自覚し、特に20代・30代で高率です。また、男性においても半数以上(52.4%)がボディの敏感肌を自覚しており、特に20代・30代は高い傾向にありました。

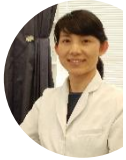


また、同調査において、1年以内に行ったボディの敏感肌を経験したときの対処法を尋ねたところ、「一般の保湿剤」(56.8%)や「敏感肌用の保湿剤」(37.9%)といった塗るケアに比べ、洗うケアは低く、「敏感肌用の洗剤」は3割未満(28.8%)にとどまりました。この結果からも、敏感肌への対応は、「塗るケア」に意識がいきがちで、「洗うケア」への意識が低いことがわかります。

ボディの敏感肌経験時における対処法



2020年2月 n=691(敏感肌自覚者男女) 複数回答



洗うことによる保湿ケアは、敏感肌ケアの一丁目一番地 塗る保湿ケアの効果を高めることにもつながります (福永先生)

敏感肌は、塗るケアも大切ですが、洗うことによる保湿ケアも重要です。私のクリニックにいらっしゃる患者さんの中にも、「きちんと保湿しているのに肌が改善しない」という方がいらっしゃいますが、洗うケアを意識的にしている方は、塗るケアをしている方よりも少ないと思います。

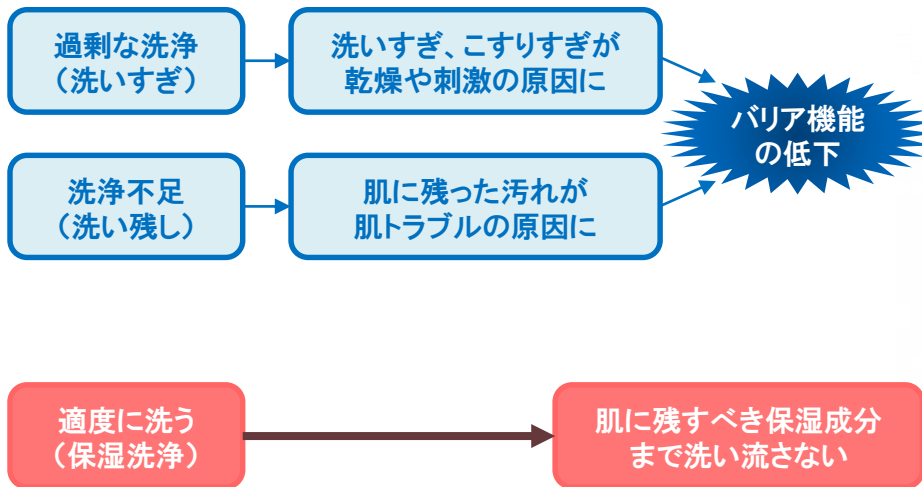
洗うケアの基本は“洗い残しをしない”そして“洗いすぎない”ことです。皮膚に付着したほこりや汗、化粧の洗い残しなど、汚れを残したままにすると、皮膚が刺激され、かぶれやかゆみ、また、細胞間脂質の酸化が、肌にダメージをもたらします。

きちんと汚れを落とすには、洗浄料を使う必要がありますが、“洗いすぎ”は禁物です。すこやかな肌を保つために

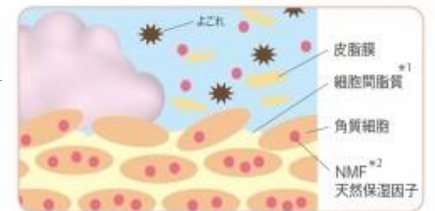
欠かせない、皮脂膜や細胞間脂質、天然保湿因子(NMF)などの保湿成分まで洗い流すと、肌のバリア機能が低下し、肌へのダメージが起こりやすくなります。よくみられるのが、背中での洗い方。目で見えるところはやさしく洗っていても、背中の肩甲骨の間などは手が届かないため、タオルでこする人が多くみられます。

バリア機能を守りながら、不要な汚れだけを洗浄する。こうした「洗うことによる保湿ケア」は、敏感肌ケアの一丁目一番地。塗るケアをしてもきちんと洗浄しないと、かえって肌にダメージを与える可能性があります。逆にいえば、きちんと「洗うケア」ができていれば、うるおいを補う「塗る保湿ケア」にも確実に差が生まれると思います。

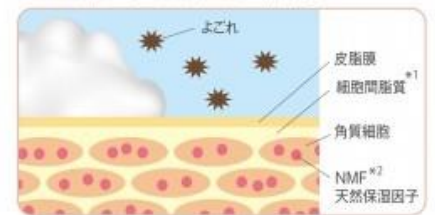
洗うことから始まる保湿ケアの仕組み



●バリア機能を低下させる洗浄 (イメージ図)
肌に残すべき保湿成分まで洗い流してしまうと洗浄が更なるバリア機能低下の原因になります。



●バリア機能を守って洗う保湿洗浄 (イメージ図)



*1 細胞間脂質:角質細胞間でバリア機能の一端を担う
*2 NMF: Natural Moisturizing Factor

洗うことから敏感肌のバリア機能をいたわる保湿洗浄

ミノン®

- 低刺激性、弱酸性、アレルギーの原因物質を極力カット
- 開発当時から変わらない独自の処方コンセプト
- 肌をやさしく洗うことから考える



「敏感肌」という言葉もなかった時代、 肌トラブルの回避の鍵が洗浄にあることに着眼し、ミノンが誕生

1973年、まだ「敏感肌」という言葉も一般的ではなかった時代に、化粧品アレルギーによる肌トラブルをなくしたいという思いから、肌トラブル回避の鍵が洗浄にあることに着眼して誕生したブランド、それがミノンです。

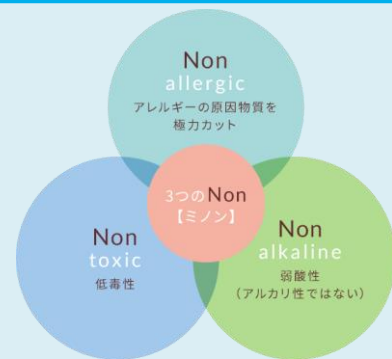
世代を問わず、肌へのやさしさを第一優先に考えたミノンボディケアシリーズは、多くのお客様に愛され続け、薬用ボディソープにおいてトップブランドに位置しています。



(写真: 1973年に発売された初代ミノンの固形石けん)
ミノンの原点である固形石けんは、たった4つの成分(水を除く)のみで作られています。発売以来、パッケージは何度もリニューアルしていますが、肌へのやさしさを最優先に考え、現在もその処方コンセプトは受け継がれています。

ブランド名の由来は「3つのNon」

ブランド名は、開発当時から目指している3つのNon。アレルギーの原因物質を極力カットした「Non allergic」、肌に対する負担が極めて少ない「Non toxic」、健康な肌と同じ弱酸性の「Non alkaline」に由来。赤ちゃんから大人、お年寄りまでお使いいただける製品であり続けるために、今もこの考え方を守っています。



ミノンボディケアシリーズ ラインアップ



(左から)

- ミノン全身シャンプー しっとりタイプ
販売名:ミノン全身シャンプー (医薬部外品)
- ミノン全身シャンプー さらっとタイプ
販売名:ミノン全身シャンプー-S (医薬部外品)
- ミノン全身シャンプー 泡タイプ
販売名:ミノン全身シャンプー-W (医薬部外品)
- 販売名:ミノンスキンソープ
販売名:ミノン (化粧品)
- ミノン薬用スキンソープ
販売名:ミノン-De (医薬部外品)
- ミノンベビー全身シャンプー
販売名:ミノン全身シャンプー-a (化粧品)

(左から)

- ミノン 薬用ヘアシャンプー
販売名:ミノンヘアシャンプー-a (医薬部外品)
- ミノン 薬用コンディショナー
販売名:ミノンコンディショナー-a (医薬部外品)
- ミノン薬用保湿入浴剤
販売名:ミノン入浴剤 (医薬部外品)
- ミノンやさしく洗う弱酸性タオル

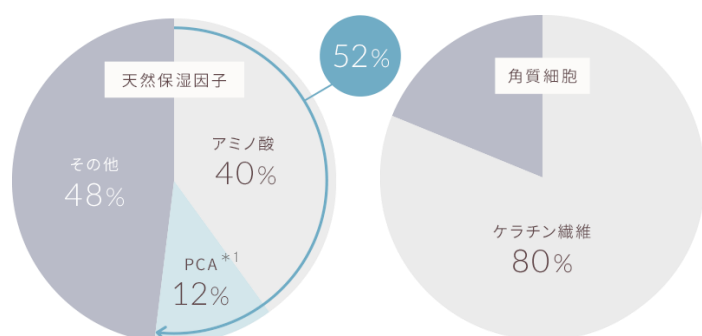


「植物性アミノ酸系洗浄成分」配合 肌のバリア機能を守りながら、しっかり汚れを落とす

全身シャンプーやヘアシャンプーなどで構成されるミノンボディケアシリーズ。そのすべての製品に共通するのは、肌にやさしい植物性アミノ酸系洗浄成分を採用するとともに、配合成分を必要最低限に厳選した処方です。

植物性アミノ酸系洗浄成分は、肌のバリア機能を守りながら、皮膚に付着した汚れをしっかり落とす洗浄力が特長です。

うるおいに満ちた肌の鍵「アミノ酸」へのこだわり



人の身体の60~70%は水分で、約20%はアミノ酸です。角質層に水分を蓄える成分「天然保湿因子(NMF)」の約半分はアミノ酸、角質細胞で約80%を占め、「天然保湿因子(NMF)」を支えるケラチン繊維もアミノ酸でできています。アミノ酸は肌の「うるおいの素(もと)」になる大切な成分なのです。

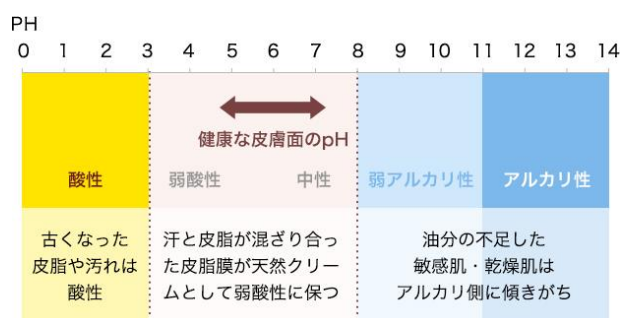
製薬会社が皮膚科学に基づき敏感肌を考えた処方設計



*1 PCA:アミノ酸から作られる天然の保湿成分
*2 エチルアルコール

すこやかなバリア機能を保つため「弱酸性」へのこだわり

健康な肌は弱酸性に保たれています。弱酸性に保たれた健康な肌はうるおいを保ちやすく、皮膚常在菌のバランスやターンオーバーのリズムも整う理想的な環境です。しかし、皮脂の少ない敏感肌や乾燥肌はアルカリ性に傾きがちです。健康な肌状態であれば、アルカリ性に傾いた肌を弱酸性に戻そうと肌が働きますが、肌が荒れていると戻す力が弱まっています。



発売当初からミノンがこだわっているのは、肌を「弱酸性」に保ちながら汚れを落とすということ。植物性アミノ酸系洗浄成分配合で、洗っているときも肌を弱酸性に保ち、肌が本来持っているうるおい成分を適度に残しながら汚れや余分な皮脂をしっかり落とします。

石けんカスが肌に残りにくいので、洗い上がりの肌はつっぱり感のない、なめらかな肌触りになります。

ミノン石けん類	一般的な石けん
主成分	
アミノフト® (パーム脂肪酸グルタミン酸Na/ アシルグルタミン酸Na)	脂肪酸ナトリウム
pH	
弱酸性(6前後)	アルカリ性(10前後)
脱脂力	
弱	中
向いている肌質	
バリア機能が低下している肌、乾燥肌、敏感肌などで外部刺激を感じやすい肌、バリア機能が未熟な赤ちゃん、高齢者、一般的な中性・アルカリ性の石けんですっきり感を感じやすい方	皮脂量が多く健康な肌、洗浄頻度が少ない場合、油汚れなどを落としたい場合

製薬会社の男性敏感肌研究から生まれた 「ミノンメン」シリーズ

敏感肌を自覚する男性が存在するにもかかわらず、その悩みに対処するための選択肢が少ない。この状況を解消するため、当社は2018年に男性の敏感肌向けスキンケアシリーズ「ミノンメン」を立ち上げました。

「ミノンメン」は揺らぐことのないミノンの哲学を基盤としながら、皮膚科学に基づき男性の敏感肌を研究し、開発した低刺激性処方になっています。



(左から)

- ミノンメン フェイスウォッシュ**
販売名:ミノンメンW [化粧品]
- ミノンメン 薬用フェイスローション**
販売名:ミノンメンL [医薬部外品]
- ミノンメン 薬用フェイスミルク**
販売名:ミノンメンM [医薬部外品]
- ミノンメン フィニッシング セラム**
販売名:ミノンメンS [化粧品]
- ミノンメン 薬用全身シャンプー**
販売名:ミノンメンZS [医薬部外品]

乾燥とベタつきが両方気になる男性へ

男性の肌悩みに多い「顔のベタつき・テカリ」。実は、男性の肌は女性に比べて皮脂量が多い一方、水分量が少ない特徴があります。さらに男性はスキンケアの不足や、毎日のひげ剃りで刺激を受けやすく、肌は乾燥し、角質層がかさつき、ゴワつきがちです。そこに分泌された皮脂がのことで、「顔のベタつき・テカリ」が生じているのです。

皮脂をそのままにしておくと時間とともに酸化して肌への刺激物となることもあり、結果として、肌あれやバリア機能の低下を引き起こしたり、臭いの原因になったりもします。

「ミノンメン」のやさしさ&機能性処方

臭いのもととなる皮脂や汚れ、ベタつきをしっかり落としながらも、肌本来のうるおいを守り、負担をかけにくい処方。洗い上がりもしっとりしています。

アミノ酸系保湿成分配合

水分と油分を補い、乾燥とベタつきのバランスを整える

うるおい補給型アミノ酸

プロリン、PCA-Na(アミノ酸誘導体)*1:保湿

うるおいバランス型アミノ酸

アスパラギン酸:整肌

【サポート成分】角質層に浸透しバリア機能をサポート

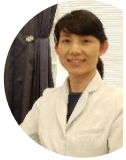
『浸透*2型アミノ酸系オイル*3(セラミド類似成分)』配合

*1 医薬部外品はDL-PCA・Na液 *2 角質層まで

*3 ラウロイルグルタミン酸ジ(フィトステリル/オクチルドデシル)[医薬部外品はラウロイルグルタミン酸ジ(フィトステリル・オクチルドデシル)]:保湿



乾燥もベタつきも気になる敏感肌の「洗う保湿ケア」



肌へのやさしさを考え、肌を守りながらきちんと汚れを落とす、
敏感肌向けボディケアが大切（福永先生）

私は、敏感肌の患者様に対して、洗浄料は①洗浄力が強すぎず肌にやさしいもの、②成分ができるだけシンプルなもの、この2点で選ぶようにアドバイスしています。

ミノンボディケアシリーズは、界面活性剤の中でも、肌を守りながら洗う植物性アミノ酸系洗浄成分を使用しています。植物性アミノ酸系洗浄成分は、肌と同様の弱酸性で、肌の保湿成分に含まれるアミノ酸の流出が少ない一方、表面の汚れに対する洗浄力は十分にあるので、“洗い残し”、“洗いすぎ”を防ぐことができます。成分の設計もシンプルなので、理想的な洗浄料の一つだといえるでしょう。実際に私も使ってみました。洗い上がったとき、お肌がしっとりとした感じがしました。

また、洗浄料は、直接人体に接して使用されることから、界面活性剤もより毒性の低いものが求められます。ミノンボディケアシリーズは、肌へのやさしさを考えた処方設計で、バリア機能の低下しがちな敏感肌にも使うことができる洗浄料だと思います。

最近、ミノンでは「ミノン メン」シリーズも出していますが、皮脂の分泌量が多い男性では脂漏性皮膚炎など、皮脂によるトラブルも多くみられます。また、ゴシゴシ洗いをして乾燥肌を悪化させてしまう方もいらっしゃいます。余分な脂を落とし、皮膚にダメージを与えずに洗うというケアができることは良い点だと思います。

R&D Review

研究開発部
開発第二グループ
濱口 真実



“変わらない”価値を大切に、多くの人に愛されるブランドに

ミノンのボディケアシリーズは少し深く肌トラブルに悩んでいる人に向けて、スキンケアシリーズは敏感肌だけドスキンケアを楽しみたいし、きれいになりたいと願う方々に向けて製品を開発しています。

ミノンは“変わらない”ことが最も大きな価値です。2014年からブランドの強化に取り組みましたが、敏感肌の方は処方を少し変えただけで肌に合わなくなる可能性もあるため、パッケージは変えてもミノンとしての処方を守っています。45年以上の歴史を重ねて、今では、親子代々ミノンを使い続けてくださっているお客様もいらっしゃいます。

これからも本当に困っている方に寄り添い、ミノンを多くの方に愛されるブランドに育てていきたいと考えています。

研究開発部
研究センター
製剤研究第二グループ
高尾 典弘



試験を重ね、「ミノン クオリティ」を守る

ミノンブランドの品質には絶対的な自信を持っています。流行のあるスキンケアにあって、たとえちまたで話題になっているようなことでも、品質上でのリスクやトラブルが発生しないか徹底的に検証し、根拠となるデータを得られなければ、それを取り入れることはありません。臨床試験も含めて科学的根拠を示すことに時間もコストもいとわず、必要に応じて医薬品チームとも連携して試験を行っています。それは製薬会社の矜持であり、強みだと考えています。

一方で、品質を守るために見直せないものがあります。「ミノンスキンソープ」は発売から40年以上たちますが、同じ製造機器で作り続けています。他に例のない処方であるが故に製造設備も特別で、変更することができないのです。

優れた処方、積み重ねてきた知見を大切にしながらも、2年、3年先のトレンドを読み解き、必要な開発期間を設けて、科学的根拠のある製品づくりをする。それが「ミノン クオリティ」だと考えています。